NASC RALLY FINAL

NASCラリー最終戦

2008年11月8日　@静岡県 伊豆下田起点130km

text：*Kenji NAKAMOTO*（中本健二）　*photo*：NASC事務局

ランボルギーニ・ミウラは初のミドシップレイアウトを採用した記念すべきモデルだ。降りしきる雨と曇る窓に、エントラントは四苦八苦の様子だった。

2代目ブルーバードは、SUのツインキャブを備えたSSS（スーパースポーツセダン）が設定されるなどスポーティーさを押し出し、日本GPへも出場している。

フィナーレを迎えたNASCラリー

NASC ラリーは、2006年から年間4戦で行なわれてきた公道ラリーイベントだが、3シーズン目を一区切りとして、去年11月にファイナルを迎えることになった。最終戦の会場となった静岡県下田市では、市の全面的な協力を得られたこともあり、フィナーレを飾るに相応しく、特別に市内のパレードが組み込まれた。

参加車輌は、1930年代に生産された戦前のモデルやトヨタ2000GTなど、生産国や年式に因らずバリエーションに富んだモデルが集まり争われる。競技は、伊豆下田を起点に約130kmを走破するルートが設定されており、スタートとなったホテルのエントランスを抜けてすぐのロータリーでは、早速テクニックの要求される連続PCが始まる。さらに、移動中もシークレットチェックの問題が出されるため、ドライバー、コ・ドライバー共に気を休める暇もなく、常に集中して競技に臨まなければならない。しかも、雨の降りしきるコンディションで行なわれたため、普段よりもエントラントの疲労は大きかったことだろう。

コースの折り返し地点となった、天城東急ホテルに用意されていた連続PCは、濃い霧に包まれ視界を遮られるため、なかなかペースが掴めずに苦戦する選手が多かったようだ。そして、PCをクリアしてレストコントロール地点に到着した選手は、束の間の休息と食事を取り、次は海岸線のルートを通りゴールの下田へ向けてひた走る。ちょうど午後のスタートを切る頃に、それまで降っていた雨が上がり、最後は気持ちよく走行を重ねてフィニッシュを迎えた。

夜にはシリーズ戦の表彰式を兼ねたディナーパーティーが開催され、そこでは公道を使用する際に協力を得られた下田市から伊勢えびのプレゼントが供されるなど、参加者同士で地のものを味わいながらラリーを振り返り、遅くまで最後の夜を楽しんでいたようだ。

NASCラリーのシリーズ戦は終了となったが、今後は新しい試みとしてビギナー育成の"ラリースクール"と、技術レベルのアップを目的とした"トレーニング会"を企画していくそうだ。公道ラリーで、上位入賞を果たしているエントラントも多く参加してテクニックを磨いたNASCのイベントで、あなたも競技者として公道ラリーへ挑戦してみてはいかがだろうか。なお、イベントについての新しい情報はNASCホームページに常時アップされていくとのことだ。

■問い合わせ先
NASC RALLY事務局
URL：http://www.nasc-swp.com/

時折激しく振る雨も気にせず競技を続けるロータス・セブンは、寒さと雨の対策も万全だった。セブン乗りとしては、当たり前の装備といえる？

美しいスレートグレーのボディが雨に映える356。足もとには、当時の純正パーツに用意されていた、クロームキャップがあわさる。

ACエースは、かのキャロル・シェルビーが、フォード製のV8 エンジンを組み合わせて、シェルビーACコブラを生みだすきっかけとなったモデルだ。

トライアンフ・ヴィテスを駆るのは、NEKOモーリスのレストアでお馴染み、永遠ボディーの松村氏。多くのイベントへ参加するベテランエントラントだ。

フィアット・バリラのステアリングを握るのは、公道ラリーやクラブミーティングに参加するなど、ヒストリックカー愛好家としても名高い堺正章氏だ。

濃霧の中から、次々と現れるトヨタ2000GTたち。フォグランプの追加など、オリジナルの美しさを崩さず、それぞれに凝らされたモディファイが光る。